

# ミニチュア富士山 砂町の富士塚を指定!!

江東区教育委員会は、文化財保護審議会(会長・中村ひろ子・神奈川大学教授)の答申を受け、平成16年度諮問分のうち、区文化財として新たに1件を指定、5件を登録し、1件を登録解除、1名を認定解除しました。この結果、登録文化財の総数は1031件、指定文化財は24件になりました。(写真は移築前の富士塚・背面大宮口、山倉昭良氏所蔵)



# 下町文化

NO. 229  
2005.4.28

発行  
江東区教育委員会  
生涯学習部生涯学習課  
〒135-8383  
江東区東陽4-11-28  
TEL(03)3647-9819  
<http://www.city.koto.lg.jp/>

## □ 16年度新指定・新登録文化財紹介

### ○ 囲炉裏ばた 古民家と薪

### □ 八百八町調査隊 大江戸を掘る!

#### 時雨忌記念講演録 「現代詩の窓から見た俳句」

#### 区外資料調査報告 中川番所の史料をもとめて

### □ 江東今昔(6)

### □ 寄贈民俗資料リスト

### ● 文化財掲示板

#### 指定文化財

#### 【有形民俗文化財】砂町の富士塚

南砂7-14-18 富岡八幡宮  
富士塚は富士山を模した小型の人造山です。富岡八幡宮の富士塚は、江戸富士講の流れを汲む山吉(す)御水講が中心となって信仰してきました。

山吉講は食行身縁の直弟子とされる渋谷道玄坂の地主吉田平左衛門(三行貞山・?・1754)が創始した富士講です。講が結成された詳しい時期は不明ですが、人穴浅間神社(静岡県富士宮市)にある文化9年(1812)の墓塔から、文化・文政期(1804~30)には成立していたと考えられます。その後、近代に入り、砂村の「す」を表した(す)と、富士山の頂上に湧く金明水に由来した「御水」をあわせて(す)御水講と名乗るようになったそうです。

富士塚についてですが、塚に配置さ

れている石碑の中で最も古いのは天保4年(1833)ですので、文化・文政期から天保4年までの間に造られたと考えられます。塚は現在、神社境内の北側にありますが、もともとは20mほど北にあり、昭和37年7月にガソリンスタンド建設のため、現在地に移築しました。移築直前の写真を見ると、塚の形状が若干変わっていますが、烏帽子岩碑、経ヶ岳碑、小御嶽社祠などの主な石造物の配置は変わっていません。

区内には他に2基の富士塚(富岡八幡宮・亀戸浅間神社)がありますが、砂町の富士塚のみが現在も講が存続し、活動の拠点として、山開き(7/1)などが行われています。



現在の富士塚(正面・吉田口)



周囲に高い建物がなく、目立っていました(昭和30年頃)

## 登録文化財

### 【有形民俗文化財】

馬頭観世音供養塔 昭和3年在銘

北砂2-1-40 妙久寺

馬頭観音塔は牛馬の供養のために建てられます。戦前の城東地域は鞍馬業や搾乳業に携わる人々が多く、本碑もこれに關係するものでしょう。



馬頭観世音供養塔  
(妙久寺)

### 山玉講同行碑

附 拓本2枚昭和29年6月17日採拓

富岡1-20-3 富岡八幡宮

八幡宮境内の北西にある富士塚の左側に建っています。富岡八幡宮の富士塚(区登録史跡)は別名「深川富士」といい、『東都歳事記』などに描かれる名所でした。文政3年(1820)に築造された富士塚は昭和40年頃に壊されましたが、平成14年に塚が再建され、関連する石碑が周囲に置かれました。本碑はそのうちの1基です。

本碑は下部のみの残欠ですが、昭和29年に採った拓本によって、文政3年6月に山玉講によって奉納されたこ

とがわかります。山玉講は本所猿江(猿江)・深川今川町(佐賀2)の清山正行こと田中屋清六が創始した講で、富岡八幡宮の富士塚を築造した講です。講員は深川が中心ですが、亀戸浅間神社(亀戸9)に山玉講が寛政7年(1795)に奉納した水盤があり、広い範囲で活動していました。

### 深川山玉講登山再建立手伝碑

富岡1-20-3 富岡八幡宮

山玉講同行碑の左側にあります。山玉講の詳しい結講の時期はわかりませんが、遅くとも慶応4年(1868)にはその存在が確認できます。富士浅間神社(山梨県富士吉田市)の御師・大國屋田辺四郎家に伝来する文書によれば、幕末の草莽隊のひとつ蒼龍隊一同が深川富士を参詣した帰りに平野町



左から順に、平成14年に再建された富士塚、山玉講同行碑、深川山玉講登山再建立手伝碑(富岡八幡宮)

(平野1・2)で山玉講から馳走をうけています。御師田辺氏は山玉講を檀那とし、年始めに玉串や守札を配りに深川一帯を訪れていました。講員は50〜75名ほどで、範囲は材木町(福住2)、木場(木場2〜5)、富岡八幡宮一の鳥居(門前仲町1〜4)、蛤町(永代2)と、深川南部が中心でした。

### 【史跡】

松平定信海莊跡

牡丹3、古石場2・3付近

寛政期に老中として幕政改革に取り組んだ松平定信が文化13年(1816)に入手した抱屋敷です。定信は造園家としても有名で、この屋敷も桜やツツジなどを植えた瀟洒な庭園でした。

### 洲崎球場跡

新砂1-1・2付近

洲崎球場(別称・洲崎大東京球場)は、日本プロ野球草創期の野球場で、昭和11年(1936)2月に日本で6番目に結成されたプロ野球チーム「大東京軍」の本拠地でした。

プロ球団結成は昭和9年に開催された日米野球をきっかけにして、同年12月に東京、大阪、名古屋に相次いで誕生し、昭和11年には7球団によるプロ野球公式試合が開始されました。

しかし、東京にはプロが使用できる野球場がなく、在京球団の本拠地建設が急がれました。そのため、洲崎球場



洲崎球場：「国民新聞」  
昭和11年11月30日  
(東京新聞社所蔵)

はわずか3ヶ月ほどで完成し、秋に大日本東京野球倶楽部(現読売巨人軍)とタイガース(現阪神タイガース)による初の日本一決定戦が開催され、沢村栄治投手を擁する巨人が初代王座につきました。この試合はプロ野球史上屈指の好ゲームといわれ、現在の「伝説の一戦」の由来になりました。

洲崎球場は急いで造られたため、満潮時には潮が入り、バケツで海水を取り除いて使用したそうです(川上哲治『回顧録』より)。洲崎球場は、昭和13年の3試合を最後に閉鎖されました。

### 登録解除

【無形文化財(工芸技術)】

足袋製作

### 認定解除

【無形文化財(工芸技術)】

箕輪庄太郎(足袋製作)

(解除理由)逝去のため。

## 古民家と薪まき



自然と深い関わりをもちつつ、人々の生活が成り立っていた江戸時代の村。スイッチひとつで電気、ガスが使える現代とは大きく異なり、山や雑木林などが生活のための燃料を確保する場として重要でした。とくに冬は、囲炉裏や火鉢で暖をとるため、薪や炭は欠かせることができません。そのような、囲炉裏や火鉢が生活の主役だった時代は、つい四、五十年前まで続きました。

しかし、ここ数十年の間に生活様式は様変わりし、日常生活で薪や炭を使う光景は、あまり見なくなりました。そのように考えると、江戸時代末に建てられた旧大石家住宅は、その建築技術とともに、当時の生活様式を現在に伝えるという意味において貴重な文化財といえます。



薪置場の様子

旧大石家住宅は、月々金曜の間、「旧大石家住宅友の会」の皆さんによって維持・管理されています。活動内容は、室内外の清掃や囲炉裏への火入れで、これらは、萱屋根や家屋を維持するための大切な活動です。ところが、便利になった社会は、古民家の囲炉裏で使う薪の確保を難しくしました。昭和30年代までは農村風景を残したこのあたりも、その後の都市化により、状況が一変しました。

現在は、区内にある公園の剪定木せんていぼくを一部分けていただき、薪としています。夏は風通しもよく、非常に涼しい古民家も、冬になるといちだんと冷え込み、薪の使用量も大幅に増えます。今後とも、薪を絶やさないうよう、安定的な供給に努めたいと考えております。

旧大石家住宅は、「旧大石家住宅友の会」のボランティア活動により維持・管理されています。一人でも多くの方にご参加いただきたく、ご案内いたします。文化財保護に関心があり、区内在住で平日に参加可能な方を対象とします。主な活動内容は、囲炉裏で火を焚くこと、室内外の清掃です。ご応募お待ちしております。

【問合せ先】教育委員会文化財係

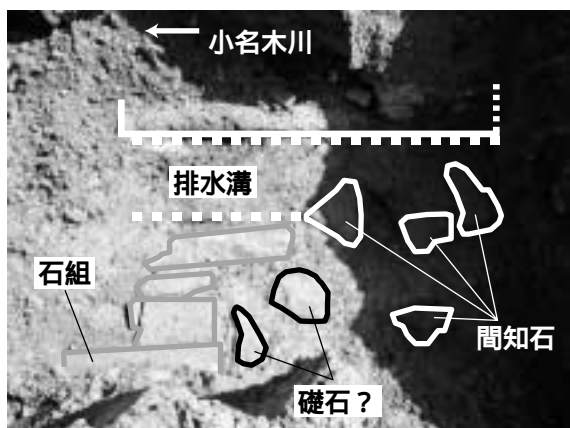
電話 03(3647) 9819

## 大江戸を掘る！

江東区は江戸時代に大きく発展しましたが、現在ではマンションや高速道路が走り、往時の町並みは消えてしまいました。しかし、江戸の町は、今でも地面の下に静かに眠っています。

発掘調査というと、縄文時代などのイメージが強いですが、江戸時代も立派な埋蔵文化財として、数多く調査をしています。

今回の調査は、白河3丁目です。ここは江戸時代の絵図によると「海辺大工町」という町屋でした。小名木川の南に面しており、木材などを荷揚げを

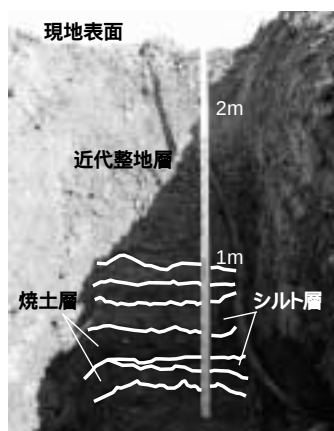


近代下水溝の出土状況

するのに便利であったと考えられます。

ここで発見されたのは、近代の下水溝と江戸時代の整地の跡です。今、私たちが立っている地面から下に2mほどのところに、近代の下水溝がありました。溝は南北方向に延びており、おそらく小名木川へと排水していたのでしょう。面白いのは、中に江戸時代の良質な石垣石も使っていたことです。この石は、大型の下水溝の一部である可能性が考えられ、江戸時代からの石材を近代まで有効に利用していました。

さらに近代の層から1m下に、焼土(赤く焼けた土)と青灰色のシルト(砂と粘土の中間の粒の泥)が20cmほどの厚さで、交互に重なった層が見られました。焼土層の中には、焼けた江戸時代の瓦が多く含まれており、これは、地盤の強化や水はけを良くするためのものと考えられます。火事などで焼けた壁土や瓦をうまく再利用して、計画的に整地していた様子がうかがえます。



近世の整地層

# 「現代詩の窓から見た俳句」

詩人 清水 哲男



ていくかと思っています。

## 2、転機

1961年に俳句を一度やめたんです。安保闘争の頃です。その頃僕は有季定型句を書いていました。中村草田男の「萬緑」誌に、句を書き、一方では政治的な活動もいろいろやっているうち、俳句ってなんだろうと。ふっと自分が一生懸命両方やっているのは変じゃないか、という気分になって、俳句ではとにかく政治が詠めない、短すぎて、五・七・五という意味でいうと器が小さくどうにもならなくなつた。

## 1、はじめに

僕は詩を書いています。はじめは俳句だったんです。最初に作った句が小学校4、5年の時で中学に入ってから、毎日中学生新聞に俳句投稿欄があり、出すと必ずとってくださった先生がいて、自覚的に俳句を作るきっかけになり、二十歳位まで続きました。詩を始めたのは二十一歳位からで、それまではずっと俳句を書いていました。

僕は二十歳頃つていうと、ちょうど金子兜太さん等の、一種の社会性俳句の時代。そのころから詩に移るわけですが、その辺りをお話すると、現代詩の窓から見た俳句というテーマに沿っ

けない。先生の見当違いにのつてずつと自分の人生もいくのか、みたいな。俳句はたしかにそういうところがあり、芭蕉についても、同じ句に対して解釈が何通りもある。句全体の解釈はいろいろあつてよいと思うし、解釈があつて初めて作者が生きたところも俳句にはあります。それを、僕は当時気がつかなかつた。青春のエネルギーの何分の一かをかけてやっていたつもりがそういう風なことにたまたま出会つてしまつて、そこで安保とするか、先生のせいではないけど、もっと自由な形式でモノを書きたいと思つたわけです。

## 3、詩への移行そして俳句へ

自由詩つていうのが僕らの書いている詩、俳句みたいに約束事はない。俳句から自由詩というものに移ろうと思つた、ところが書いてみると全然書けない。あんまり俳句を熱心にやりすぎたために、リズムとかものの見方とか俳句をずいぶんひきずつているなあ、ということを感じました。俳句つてなかなか一回溺れると助からないつていうか、大変なものです。とにかく俳句は毒だつてことを自由詩を書き出した頃には特に思いました。その反対の例だと、自由詩を書いていて俳句をやるとつていうのが僕の友達にしまして、

詩の天才で、「今に名句を作るから」つていう気概で入つてきたんですが、俳句に入れないんです。長くなったり、詰め込みすぎる。さつきの毒じゃないけど、毒をかぶつてないからどうにも作り方がわからない、詠み方がわからない。つまり俳句と現代詩というのは、それだけ違う世界つていうか同じ詩歌の世界でありながら違う構造。そこから抜け出すのがほんと僕は大変でした。

ずっと詩を書いて三十年位たつてから、何かのきっかけで俳句つて面白いかな、子どもの頃とは違う思いで見直すという時が来た。俳句に突然目がさめて、いろんな人の句を読み始めました。年齢なのか、昔の解釈とはずいぶん違つてきた。そうすると、今度は自分で作りたくなつてくる。あちこち本を読んで俳句の作り方をもう一回勉強してなんとなく俳句みたいなものを書いてきました。句集も、もう二冊目、自分なりに気に入っているのですが、専門俳人の方の俳句とどっか違つていて、なぜだろうと思つています。

## 4、俳句界について

最近の俳句雑誌などを割にまめに読んでいて思うのですが、どうもおもしろくない。俳壇つていうのはれつきとしてあると思うんですね、いわゆる結

生きてゐる以上いくらリタイアして家  
にいて時々散歩してゐるからといって、  
発表する以上はそういう目を持って書  
かないと僕はいけないと思います。が。  
僕たちに必要な文芸であるかどうかは  
それぞれの受け取り方で結構ですが、  
僕としては俳句はそうなつて欲しくな  
い気がいたします。

長い間現代詩を書いてきてそれで三

十年くらい経つて、昔熱中した俳句に戻ってみると俳句というのはいかにすばらしいかということもよくわかりま

すが、文芸として駄目なところがある  
かつていうことも非常によく分かった  
ような気がします。とにかく、俳句の  
窓からだけ俳句を見ることだけは、そ  
こだけはなんとか勘弁してくださいと  
いたくなっています。願わくば先ほ  
どから申し上げておりますように、現  
代の社会的な動きと連動した季語とい  
うものを意識して、芭蕉だつて新しい  
ことをやったわけですから、そういつ  
たところでこれからのわれわれも句を  
詠むという、時には現代というのを意  
識して、作っていったきたいな  
あという風に思っております。

\*この記録は、昨年10月10日に行われ  
た、講演会の内容を要約したものです。

# 中川番所の史料をもとめて

（麻生藩新庄家中三好家文書）

江東区の昔をたどることのできる記録は、区内にはほとんど残されていません。関東大震災や東京大空襲、たびかさなる水害などによって古文書類はほとんど失われたと言っても過言ではないでしょう。したがって、江戸時代の江東地域を知るためには、幕府などの残した公的な記録類に頼らざるを得ないのが現状であるように見られます。

しかし、江東区のことを知ることができる記録類はなにも江東区内にしか残されていないわけではありません。江東区は「水彩都市」と呼ばれるように隅田川や中川、小名木川といった河川・水路の恩恵を受け、発展していた街です。また、海に隣接していたことから、全国各地の荷物が江東区域に集まり、さまざまな場面でも人や人の交流が行われていた地域であったといえましょう。このようなことから、江東区と他地域を結びつける史料は数多く残されています。江東区古文書調査団（団長 吉原健一郎・成城大学教授）では、江東区教育委員会より区外にある江東区関係の資料を搜索し、撮

影などの手段で記録する作業を委託されました。昨年度は、茨城県水戸市にある茨城県立歴史館に収蔵・収集された史料類に関して調査を行いました。

茨城県立歴史館によって集められた古文書写真の中に三好家文書という文書群があります。この三好家は麻生藩の家老職を勤めた家でした。麻生藩は慶長9年（1604）に新庄直頼が入封し、外様大名として成立しました。当初は3万3千石の領地を有していましたが、延宝4年（1676）に跡継ぎがいなかったということで領地を一時没収されます。しかし、同年に一族の新庄直時に家督を相続してからは、1万石の大名として明治4

茨城県立歴史館によって集められた古文書写真の中に三好家文書という文書群があります。この三好家は麻生藩の家老職を勤めた家でした。麻生藩は慶長9年（1604）に新庄直頼が入封し、外様大名として成立しました。当初は3万3千石の領地を有していましたが、延宝4年（1676）に跡継ぎがいなかったということで領地を一時没収されます。しかし、同年に一族の新庄直時に家督を相続してからは、1万石の大名として明治4

茨城県立歴史館によって集められた古文書写真の中に三好家文書という文書群があります。この三好家は麻生藩の家老職を勤めた家でした。麻生藩は慶長9年（1604）に新庄直頼が入封し、外様大名として成立しました。当初は3万3千石の領地を有していましたが、延宝4年（1676）に跡継ぎがいなかったということで領地を一時没収されます。しかし、同年に一族の新庄直時に家督を相続してからは、1万石の大名として明治4

茨城県立歴史館によって集められた古文書写真の中に三好家文書という文書群があります。この三好家は麻生藩の家老職を勤めた家でした。麻生藩は慶長9年（1604）に新庄直頼が入封し、外様大名として成立しました。当初は3万3千石の領地を有していましたが、延宝4年（1676）に跡継ぎがいなかったということで領地を一時没収されます。しかし、同年に一族の新庄直時に家督を相続してからは、1万石の大名として明治4



【写真1】麻生藩家老屋敷記念館

年（1871）の廃藩置県まで存続しました。

この麻生藩の陣屋は行方郡麻生（現茨城県行方郡麻生町）に置かれます。麻生は江戸時代には麻生藩の城下町として、藩士屋敷や町人たちが集められました。現在でもその面影は残され、家老の一人であった畑家の屋敷は麻生藩家老屋敷記念館として一般に公開されています【写真1】。

また、この記念館には「麻生御殿向表御間取」と名付けられた麻生陣屋の見取り図も残されています【写真2】。この見取り図はいつ作成されたのかは不明ですが、写真下方と右側に門が設けられていたことがわかります。また左側に見える山は御殿の庭園と思われる。屋敷同様に立体的に描かれています。現在、陣屋の跡地には麻生小学校が建てられました。この陣屋は高台に設けられ、陣屋の周りには藩士たちの屋敷が、霞ヶ浦沿いに降りたところには町人たちの住まいが設けられています。そして、麻生藩の参勤交代の際には、麻生河岸から船に乗って出発しています。

三好家文書には麻生藩の公用日記から書き抜いたと思われる「日記書抜」が残されています。目録上からは、12冊の日記書抜が確認できますが、大き



【写真2】「麻生御殿向表御間取」（麻生町指定文化財）

く分けて二種類に分けられます。麻生日記と題されたものは、基本的には国元（麻生）で起こった事柄が中心に記され、一方江戸日記と題されたものは江戸の藩邸や大坂や駿府に加番として出向した際の事柄などが記されています。麻生日記については、すでに麻生町が町史の史料編に全て収録しているため、手軽に内容を読むことができます。この日記の中に、中川番所の記述が見られるのです。

麻生藩の参勤交代は、2ルート確認できます。一つは、麻生河岸から霞ヶ浦対岸の土浦（現茨城県土浦市）に上陸し、水戸街道を南下して松戸金町関所を通過するものです。そして、もう一つは麻生河岸から牛堀（現茨城県潮

来市)へ抜け、利根川をさかのぼって木下河岸(現千葉県印西市)で上陸し、木下街道を南下して行徳に出て、船堀川から中川番所を通過する方法です。

日記を詳しく見ていくと、当初は土浦廻りであったものが、ある段階で木下廻りに替えられたことが窺えます。また、中川番所を通過するために作成された武器の通行手形や中川番所に対する問い合わせについての記述もみることが出来ます。

問い合わせの事例をいくつか紹介すると、麻生日記の安永4年(1775)5月晦日の条に、参勤交代で中川番所を通過するため武器の通行手形を作成した旨が記されています。この武器と同じく「御的弓」20張についても通行手形を作成したとあります。この「御的弓」は、武器とは区別して記されているところから、藩主の稽古用の弓であったことが窺えます。この弓が実際の武器として機能するかどうかはわかりませんが、あえて分けて記したことを考えると、殺傷能力などには欠けていたのではないのでしょうか。これらの通行手形は「武器御断」の使者箕輪五郎左衛門によって中川番所へ届けられました。6月2日の条に、「御的弓」の通行手形は不用であるため、証文が返された旨が記されています。

一、中川御関所御的弓之証文不用二付、今便萩原権五郎より返却有之

(麻生日記書抜 中「安永四年六月二日」)

また、麻生日記の文化8年(1811)6月29日の条には、藩士の中に忌中の者がいるが、長髪のまま中川番所を通行していいかどうかとの問い合わせに対して、江戸家老からは前例の通り、月代を剃って通行するようにとの返答がきた旨が記されています。

一、岡人忌中長髪之所、中川御関所前如何可仕哉之旨、森右衛門を以同有之候二付、先格も有之義其段江府御家老中へ可申達候条、致月代罷登候様可申達旨申達之

(麻生日記書抜 中「文化八年六月二九日」)

一方、江戸日記には、文化2年(1805)6月朔日の条に、江戸への参勤交代の際、天候が思わしくないために船の進行が遅れ、中川番所の通行が夜間になってしまったため、藩士三好弥惣を使者として中川番所に送り、なんとか通過した旨が記されています。このように麻生藩の日記からは、大名行列が中川番所を通行していく具体的な過程を見て取ることができるのです。



【写真3】安政5年(1858)「本所深川絵図」(部分)(『江東区史』上巻付図)写真の上端を横切るのが小名木川、小名木川の下(南方)に「新庄亀次郎」の文字が見える。

麻生藩と江東区の間は、中川番所だけにとどまりません。麻生藩の下屋敷は亀高新田(現北砂)にあり、【写真3】麻生日記や江戸日記にも下屋敷の記述が見られ、近所の火事で類焼したことなどが確認できます。このように三好家文書には、江東区域に関する記述を数多く見ることができるのです。

江戸時代の江東地域を知る方法としては、このような区外史料からたどる方法もあります。そしてこのように積み重ねることによって江東区の歴史を深めることができるのです。

(江東区古文書調査団 龍澤 潤)

広重の「道祖神祭図」修復完了！

香取神社(亀戸3)の所蔵する区指定有形文化財(絵画)の歌川広重筆「紙本淡彩道祖神祭図」の修復が完了しました。巻き込みが原因で生じていた激しい折れがなくなり、シミも薄くなって、きれいに修復されました。この絵画は、亀戸村で毎年正月14日に行われていた行事で、子供たちが宝船を担ぎ、千艘万艘御ふねが参った、銭でも米でもどんと一ぱい、おつつめ、さいの神を祝ふ」と家々を練り歩き、初穂を受け取って廻ったという行事です(『東都歳事記』)。明治10年頃までは行われていたともい、長谷川雪旦の『江戸名所図会』の挿絵にも描かれるなど有名なものです。

画面右下に

「廣重」という

署名と落款が

あり、晩年の

歌川広重の肉

筆とされる貴

重なもので

す。境内に写

真入り説明板

が設置されて



修復後



修復前

# 江東今昔(6)

左の写真は、昭和30年ころの小名木川小学校（北砂5、22）の正門です。

小名木川小学校は、昭和22年、江東区と同時に誕生した小学校です。しかし、それ以前には同じ場所に、前身ともいえる小名木川高等小学校がありました。

小名木川高等小学校は、昭和16年1月に砂町尋常高等小学校から分かれて開校しました。同年3月に第1回の卒業生を送り出しましたが、国民学校令の公布により、4月には小名木川国民学校高等科と校名を変更しました。

高等小学校時代は木造2階建の校舎でしたが戦災で焼失しました。そのため小名木川小学校は、砂町小学校のバ



昭和30年頃の小名木川小学校の正門

ラック校舎の一部を借りて開校し、昭和23年6月25日に新校舎が落成し、移転しました。写真の校舎はこの新校舎です。最も児童数が多かったのは昭和30年度で、31学級、1711名の児童が通っていました。ちょうどこの写真が撮影されたころのことです。

写真を見ると、学校の脇には側溝があり、校門の前に木製の小さな橋が架けられています。「江東区立小名木川小学校」と校名が懸けられた校門の脇からレンガ塀が続いています。現在の第四砂町中学校の西側および北砂5丁目団地と郵政宿舎の間にもレンガ塀が一部残っています。この塀と関連があるのでしょいか。ご存知の方は文化財係まで一報ください。



現在の小名木川小学校の正門

## 平成16年度

### 寄贈民俗資料リスト

文化財係では、区内で使われていた生活道具を、郷土を知るための「民俗資料」として収集・保管しています。現在6千点を越える民俗資料は、ほとんどが区民の皆さんから寄贈いただいたものです。今年度は次の資料を寄贈いただきました（寄贈順、敬称略）。

#### 寄贈物件

#### 寄贈者名（住所）

消防団帽子他 前田初太郎（東陽）  
旗台石製レリーフ 大久保正治（扇橋）  
五ツ玉ソロバン 西澤智美（門前仲町）

#### 小学男子中隊名簿

齊藤富三（東砂）

#### 絵葉書他

加藤 健（亀戸）

#### 電気アイロン他

和田宣明（亀戸）

#### 学校関係資料

池澤正子（平野）

#### 定規他

木ノ本博通（枝川）

#### 高下駄他

嶋谷純世（横浜市）

#### 足踏式ミシン

中西 操（白河）

#### 大鋸

岩本助次（北砂）

#### 手あぶり火鉢

米谷正男（南砂）

#### 地図

楠 勤（亀戸）

#### 映像機材

野口眞雄（文京区）

#### 焼夷弾破片

安田貞次（北砂）

このうち焼夷弾は早速「江東区平和祈念パネル展 東京大空襲」60年目を迎えて」で展示されました。

今年度もご協力をお願いいたします。

## 文化財ニュース

### 刀剣研師・白木さん無鑑査に！

区登録無形文化財（工芸技術）保持者の白木良彦さん（古石場1）は、刀剣研磨の技術を高く評価され、去る2月23日の（財）日本美術刀剣保存協会理事会において、「無鑑査」に認定されました。無鑑査とは、その名の通り、審査の必要の無い最高位という意味で、全国約350名の刀鍛冶の頂点に立つ一握りの方々です。現在、無鑑査は人間国宝の2名を筆頭に約20名しかおりません。白木さんには、毎年秋の伝統工芸展において実演していただいております。

### 第6回「江東ふるさと歴史研究」論文募集！

江東区の歴史や文化に関する日頃の研鑽の成果を論文にまとめてみませんか。詳細は区報5月11日号、もしくは文化財係（3647-9819）まで。

#### 【締め切り】 6月24日（金）

#### 【募集内容】 歴史研究部門（20～40枚）

と文化財愛護活動部門（～40枚）。

#### 【応募資格】 どなたでも。

## 訃報

江東区登録無形文化財（工芸技術・提燈製作）保持者・杉田礼二氏（住吉2）は、去る3月23日に逝去されました。享年75歳。

謹んで追悼の意を表します。